

## 川原栄峰、『ハイデッガーの思惟』

(本文七三八頁、索引一一頁。

昭和五十六年四月、理想社)

竹内 亨

「道——著作ではない (Wage-nicht Werke)」という短い句を遺して逝った。

歴史解釈の第一歩としていわゆる明晰判明な方法の適用を掲げる人がいるが、方法への過度の依拠は危険である。むしろ解釈者にとってもっと大事なものは、歴史に向かう際の虚心な忍耐であろう。すなわち、極度に理論化され形式化された方法に対しては常に一定の距離を取りながら、物事を直かに見、考えるという本当の意味での実証精神を携え、辛抱強く工夫していくうちに、歴史という巨人は徐々にその秘密を打ち明けはじめるのではないだろうか。方法はこの工夫から生まれ、虚心な忍耐は歴史の核に対する透徹した関心に支えられるのである。

同様なことが一人の思想家に対する場合にも言える。特にその思索の一貫性、思索の経歴そのものが優に一箇の主題となり得るハイデッガーのような場合、歴史解釈の場合と同様、尖锐な機知や理論をもってするだけでは、当の対象は微動だにしないのである。そのことを暗示するかの如く、ハイデッガーは

「序文」の冒頭に掲げている。さらに同著は、『ハイデッガーの問うことの道に愚直に同行』するという虚心な忍耐を遂行し、そこから『誰にでもいつかきくと見えてくるはずのこと』として、『居住』が根源なのだということこそハイデッガーの「思惟の事柄」なのである。すなわち、ハイデッガーの思惟は『住居説』である、と、『貫き説』<sup>トウキセツ</sup> いている。こうしたハイデッガーの思索経歴の核心に対する透徹した関心を、いわば実地に即した検証で裏づけていくことが、この書の中心課題であるといってもおそらくさしつかえないであろう。

ところで一般に、ハイデッガー解釈は難しいといわれる。二千年以上にも及ぶ西洋の精神的遺産を背に、寡黙に質問者を凝視するハイデッガーの眼を前にすれば、誰しもたじろがざるをえない。しかし、ハイデッガー解釈の難しさは他にも色々の理

由がある。その一つとして、ハイデッガー自身が第一次的に、他の文脈への読みかえが可能な通常の理解ではなく、自らの思惟の道における同行を求めている、という点を挙げる事ができよう。したがって、彼の強烈なレトリック、極端に言えば言語学者のいう「個人言語 (Idiolecte)」のもとでは、そのレトリックを離れ、解釈者自身の言葉で解釈を遂行するには不安があり、かといってそのまま彼のレトリックを繰り返すわけにもゆかぬ、という困惑がつきまとう。こうした不安と困惑を性急に切り抜けようとするため、殆ど犯罪的といってもよいような独断的な切り捨て調の解釈や、また逆に信仰告白に近いような「ハイデッガー語録」を思わせる解釈も出てくるのである。

要するに、ハイデッガーに対する距離の取り方が、ハイデッガーに関する研究書の性格を大きく、しかも微妙に左右して行くのである。この辺のところは著者は、他の多くの研究書を検討したためであろう、細心の注意を払っている。

まず著者の態度は、先にも言った通り、基本的に「同行」、しかも「愚直」なまでの「同行」であるが、それでいながら、ハイデッガーの思惟を「住居説」とする。一つの冒険を、独特の非アカデミズム的な散文スタイルで敢行している。したがって、ハイデッガーの思惟を高みから引きずりおろして自分なりにわかりやすいものにしてしまったきらいがないかどうか、という危惧を自ら晴らすうとしてか、著者は自身の見解を述べるに際して、実に綿密な出典箇所を示しと適切な引用を行なう。ハイデッガーをしてハイデッガーを語らしめるための、

こうした着実な考証を旨とする方法が、本書をしてハイデッガーに対し見事な距離を取らせ、同時に、解釈書として説得力充分な、稀有な成功の一事例にしたのではないかと思う。

## 二

「諸君はただ現在の最高の力からのみ、過去を解釈することが許される」(F. Nietzsche, *Vom Nutzen und Nachteil der Historie*, 6, hrsg. von Karl Schlechta, S. 250)。これは、歴史解釈における前提の高さが当の解釈全体の死活を決するといふ、ニーチェのラディカルな言葉であるが、この辺の事情は、歴史解釈だけでなく解釈一般においても実感として受け容れられよう。解釈者の視点、つまりパースペクティヴが、解釈される事柄の無数の点描像を一つの像(焦点)へと凝集する、いわばレンズとなるのである。特にハイデッガー解釈の場合、その全貌に出会うためにどこから切り込んでよいわけであるが、焦点(収斂させる力の強さから言えば、ハイデッガー自身の「思惟の事柄」が何であったか、という視点が解釈全体を導く最も強力な赤い糸となり得るであろう。著者はこの赤い糸を「住居説」と呼んでいる。

著者のいうトポロギーとは、要約すれば、『人間本質の住む場処を言うということ』である。これが『存在と時間』以来、ハイデッガーの半世紀にわたる思索的営為において終始一貫、変わらずに深められていったのだ、と著者は見る。それは現存在 (Dasein) の住み場処 (Da) を、即ち「世界」を言う

(sagen)、ということである。そしてこの sagen とは、主観に先立つ「世界—内—存在」を言うことである以上、「語る (sprechen)」や「述べる (ausagen)」とは区別され、アポリアンティシニエでも客観的でも論理的でもなく詩作的に言う、ということである。

ところで、住居説というあまり耳なれない言葉を何故著者は用いるのか。私はあるのでなく、私は世界の内に住んで居るのだ……この「いる」、つまり「居住」が根源なのだということこそハイデッガーの「思惟の事柄」なのである、ということの書の根本テーゼが著者の念頭にあるからである。

周知のように、ハイデッガーは『存在と時間』の本論に入るや早速、「内—存在」の語源を遡り、「In-sein-women」のエティモロギーを展開する。著者はこれを、『アリストテレスからデカルト、カントを通してリッケルト、フッサールまでのヨーロッパの哲学が、……まるで自明のことのように「存在一般の意味」をフォアハンデンザインと思ひこみ、そう決めてかかっているのに対して、フォアハンデンザインではない「住む」という存在の意味を鋭く対置し、突きつけている』こととして、理解する。ここから、ハイデッガーの思惟の道では、『終始一貫、存在<sup>ザイン</sup>が思惟せられ、終始一貫、存在<sup>ザイン</sup>はフォアハンデンザインが退けられていゝ』という著者の見方が出てくるのである。従つて『人間の現存在は、第一次的には、主観としてフォアハンデン的に存在して「い」、同じくフォアハンデン的に存在する客観を表象するわけではなくて、……世に住ん

で……居る……』ということであり、これを一言で言えば、現存在の存在とは「ある」でなく「居る」「住む」ことだ——ということである。こうして、この「世界—内—居住」は無世界的に孤立して宙に浮いているいわゆる「主観」に先行するが、これを中心に据え、その住み方と住み場処とを半世紀にわたつて一貫して問い、思惟し、ますます深く掘り下げていったのが「ハイデッガーの思惟」である、というのがトポロギーからする著者の見方である。

では、この観点からするとハイデッガーの思惟行程はどのように見えてくるのだろうか。差し当つて著者の述べるところを総括すれば、およそ次のようになる。

——まず『存在と時間』は、世界の世界性、即ち『住居構造』と、気分、了解、語、即ち『居住様式』とを説いているのであるから、『思惟の行程としては第一行程にあるが、しかしすでにトポロギーという性格を十分具えているとみることができる。』つまり『存在と時間』は『トポロギーの性格を十分に具えた、トポロギーへの着手』と見ることができ、またこの見方は『半世紀にわたるハイデッガーの思惟を一すじの道と見ることがずっと楽にする。』——ところで存在一般の意味（著者は、存在一般を『フォアハンデンザイン』、意味を『可能性の条件』と解する）を問うための超越論的地平は、『住む』こととしての現存在の存在、即ち根源の本来の時間性である。このことは『存在と時間』第一部第一編及び第二編で既に露開された。』しかるのちに、今度はこの根源的時間性で通俗的、

一般的諸概念を基礎づけようとして企てたのであった。つまり根源的本来的時間性がフォアハンデンザインへと派生していくプロセスが明らかにされるはずであった。これが『幻の第三編「時間と存在」』で展開される予定になっていた内容である。――

しかし、その後この企ては放棄せられ、通俗的、一般的(伝統的)諸概念の方向への向きを逆転(ケーレ)して、ハイデッガーはむしろ、もう一度、根源への方向へと深入りしていった。つまり派生態へと出て行くトランスツェンデンタールな方向を断念し、ケーレして自ら「根源」に近く住むこと(das Nabe-dem-Ursprung-wohnen)に努めるようになった。ハイデッガーは一九三〇年ごろにトランスツェンデンタールからトポロギーへの転回をしたのである。このケーレはトポロギーの「深化」と解される。そして、『この根源への方向ということに決定的な意義をもつのは「詩人の詩人」ヘルダーリンであることだけは間違いない。こうして「ケーレ以後、ハイデッガーの思惟が『存在と時間』を離れて行くどころか、ますます『存在と時間』の「根本経験の源をなす場所」へと、「根源の近処」へと迫って行くことになる。』そして「根源に近く住む」ところの「デンカーが思惟しディヒターが詩作するときのときどき」と、即ち「性起」ということがハイデッガーの長い思惟の道の最終行程のように思われる。――

以上が著者の見方の大枠である。ハイデッガーの思惟を根本においてトポロギーとする、このような思い切った解釈は、従来の研究書でそれとして主題的に明らかにされたことはなく、

またここには、従来論議されてきた個々の問題に關してもひとまず最終的な結着を与えているという意味で、著者独自のハイデッガー解釈が全体的に提出されているように思われる。

以下、無理な要約や歴然たる歪曲を避けるため出来るだけ多く著者自身に語らせながら、解釈におけるいくつかの核心部にもう少し立ち入ることにしよう。

### 三

1 『幻の第三編「時間と存在」』は何を扱う予定であったのか――

本書の構成において、『第一部 世界―内―存在||居住』から『第二部 住居説』へ跳躍する部分、即ち本書の結節点に位置する『第十一章』は『幻の第三編「時間と存在」』と題されており、著者の解釈のピークをなす章である。一般のハイデッガー解釈においても、『存在と時間』の予告されながら未完に終わった第一部第三編「時間と存在」の内容に關する問題は、熱い議論を引き起こしたものの一つである。「最初の仕上げ」は焼却され(Martin Heidegger, *Gesamtausgabe*, Bd. 2, S. 582)、「新しい仕上げ」のはずの『現象学の根本諸問題』(一九二七年講義)も未完であり、従ってこの第三編は著者の言う通り、文字通り「幻」である。しかしながら著者は、「時間と存在」が「幻」でありながらも、具体的にはどんな問題を扱う予定になっていたかに關して、『存在と時間』の範囲内においてほぼ確定可能である、とみなしている。その適確で周到な引用

と、丹念な考証は充分に説得力がある。勿論ここではそれをそのまま再現することはできないが、大筋の結論的な部分を要約してみよう。

「時間と存在」において「存在一般の意味への問い」が仕上げられるはずであったことはよく知られている。では「存在一般の意味」とは具体的にどういうことなのか。『そもそも存在一般の意味への問い』という言い方が、ハイデッガーとしてはいささかルーズではなからうか。『そう著者は苦言を呈しつつ、『存在と時間』の中で、第三編への数多くの言及、特に第二十一節における「第一部第三編参照」とある文(Stein und Zeit, S. 100)を考証して、『ハイデッガーが「存在一般」と言っているのはさしあたり、伝統的な存在論が一般に、自明的に、しかし非表明的に、存在の意味と悪いこんでしまっているフォアハンデンザインのことではなからうか』とまず解釈する。具体的には例えば、『それは』イデア、ウーシア、アクトゥアリタス、現実性<sup>レリタート</sup>、エッセンティアとエクシステンティアという根本分節、レス・コギタンスとレス・エクステンサという二つの存在様式もしくは変様態、さらにコプラなどを指すのである。『これらは実際第三編の「新しい仕上げ」にしようとした『現象学の根本諸問題』でもとりあげられている概念である。』

ところで一方、「意味」とは、『存在と時間』によれば「可能ならしめるもの」であり、「可能性の条件」のことである。とすれば、「存在一般の意味への問い」とは、伝統的存在論において一般に自明とされてきた存在概念、即ちフォアハンデンザ

インの、現存在における可能性の条件を問うことである、『存在と時間』の線に沿うならば、現存在の根源的時間性の時熟がどうしてフォアハンデンザインを派生せしめるのか、と問うことである。それは、『現存在の根源的時間性からのツーハンデンザインの発見、出会い、それを跳び越えてのフォアハンデンザインの跳び入り、このプロセスの可能性の条件へとトランスツェンデンタールに問うことである。』このように、根源でもって派生態を基礎づけるという、トランスツェンデンタールな方向を完遂するはずであったのが、『幻の第三編「時間と存在」』にはかならない。

しかも、このプランが果されないと、現存在を「現存在」と命名することの『ジャスティファイ』が出来なくなる。『一般に「存在」と呼ばれているものは「ダーザイン」から由来(派生)しているのだ』と言いつつ切れなくなるからである。——さらに『存在と時間』第二部では、カント、デカルト、アリストテレスの伝統的存在論を破壊するはずになっていたのだから、その準備としてこの『幻』の第三編で伝統的一般的な存在の意味、概念の出自を洗っておく必要があったのである。

かくしてこう結論できる。「存在一般の意味への問い」は、『普遍的な現象学的存在論……になるはずであった第三編「時間と存在」では……、伝統的一般的な存在概念の「可能性の条件」(だから「意味」)はやはり根源的時間性である、という形でトランスツェンデンタールに答えられるべきものであった。したがってこの問いと幻の第三編とは、根源的時間性から伝統

的、「一般的」「存在」概念へと向いていた、つまり内から外へと向いていたのである。……現存在という命名のジャスティファイ（伝統へのつなぎとめ）としても、第二部の伝統解体への準備としても、この伝統への「方向」、外への方向は当然でもあり必要でもあった。——しかしこの試みは果されなかった。（それ故、ハイデッガーは『存在と時間』以後、「現存在」という語をあまり用いないで単純明快に「人間」と言うようになったのであろう。また、フォアハンデンザインの優位の由来を「基礎的存在論の枠内で、証示することは、本来無理なことである」として、ハイデッガーはむしろ、これをヨーロッパ的な現象として「ゲシツクの観点から」扱うようになる、つまり「トランスツェンデンタールな態度を断念または放棄して存在歴史的に思惟」するようになったのである。そう著者は解釈する。実際、インド、中国、日本においてフォアハンデンザインの優位は必ずしも目立つ事態ではない。——これは興味深い示唆である。）

ともかく幻の第三編は「さし控えられた」のである。「一体、実質的内容として何事が起つたのであろうか？」この問いに答えることは、ハイデッガーのあの「転回」の問題に答えることになる。つまり幻の第三編「時間と存在」の挫折は転回の問題なのである。

## 2 転回——トランスツェンデンタールからトポロギーへ

「*Ueber den Humanismus*, S. 17; Klostermann, Frankfurt a. M. 1968.)

このあまりにも有名な言葉は、ハイデッガーが『ヒューマニズムについての手紙』の中で、第一部第三編をさし控えた事情に言及したものであるが、これを著者はこう解釈する、「ここで全体が逆転する」という転回とは、伝統的「一般的存在概念へと向いて外へと出て行くはずであった「時間と存在」がその外への方向を断念して、内への、「場処」への方向をとるようになった、つまり住居説へと「逆転」し「転回」したことからい」、と。この解釈で、「外へと出て行く」といういささか大きな表現で言われている事態は何か。「本来の根源的時間性」が、存在一般（フォアハンデンザイン）の意味（可能性の条件、基礎づけるもの）を問うための「トランスツェンデンタールな地平」（*Sein und Zeit*, vii）である以上、それはフォアハンデンザインへと超え出て行くことを、つまり根源でもって派生態を基礎づけるというトランスツェンデンタールな超出を意味する。そしてこのことの解明を具体的に遂行するはずになっていたのが「幻」の「時間と存在」であったのだから、「ここで全体が逆転する」とは、予定されていたこの方向そのものが全体として逆転して、もう一度根源へと深入りして行くという事態を言っているのである。著者の表現に従えば、それは、「カントの場合と同様、……存在者を可能ならしめる「可能性の条件」……にたずさわっている認識（開示）」から、即ち「存在論的に時間が存在の意味つまり存在の可能性の条件だとする開明にたずさわる」「トランスツェンデンタールな方向から、逆転深化して『存在と時間』の根本経験のいわば震源地

である「場処」の究明(トポロギー)へ向かうことなのである。しかし、一体ケールとはハイデッガーという一人の思惟の方向が転回したというだけのことなのだろうか。実はここに従来のいわゆる「ケール論議」の殆どが見落していたものが潜んでいる、と著者は指摘する。

「ほとんどすべての人が(最初のレビューットの論調に刺激せられて)ケールをハイデッガーの思惟のすじみちのつじつまの問題としてのみとりあげている、つまり「ハイデッガーの思惟の方向転換」としてのみ解している。従って「ハイデッガー自身が講演「ケール」で「存在の現成の真理」が「転回する」(つまりゲシツクの向きが転回する)」と語っているのがほとんど無視されてしまっている」のである。むしろ、「ケールとは第一次的にはゲシツクの向きの転回をいい、次いで、その転回を思惟する「転回の思惟」へとハイデッガーの思惟が方向転換したことをいう。後者は前者への応答として独自に完遂されたのである。この確認は重要である。もしこの確認を逸するならば、ヨーロッパ「形而上学」におけるフォアハンドインザインの優位の問題をトランスツェンデンタールに基礎づける仕事を断念し、むしろヘルダーリンに沿いながら「存在に在る」<sup>ゾーグ</sup>に對して存在に在る<sup>ゾーグ</sup>を軸として存在歴史的に思惟しようとするケール以後のハイデッガーの思惟の道は不可解になるであろう。何故なら「ゲシツクの向きの転回」ということとヘルダーリン的「在る」とをはずしてしまつたら、ハイデッガーの「ケールの思惟」は実質なきものになつてしま

う。ゲシツクの向きの転回に呼応してこれに応答し、あるいはその転回を待つのは、詩人的にこの地上に住むデンカーとディヒターとだとハイデッガーは考えているのだからである。

要するに、ハイデッガー自ら言うケールの第一義は、存在のゲシツクの向きが転ずる、即ち存在忘却が大きく向きなおろうとしている、ということに存するのであつて、従つてまた、これに呼応する彼の思惟は、ヨーロッパの思惟の歴史即ち存在のゲシツクにおいて、極めて歴史的な課題を背負うことにもなるのである。

### 3 後期ハイデッガーにおけるヘルダーリンの決定性——

「一九三〇年代以後のハイデッガーの思惟をヘルダーリンとの近親性を抜きにして理解することは不可能」であるという観点は、本書全体を通じて、一貫して強調され検証されているもの一つである。それは、特に後期の解釈にのぞむ際の著者の立場の独自性を決定的に証示する観点でもあつて、従つてまた本書の大きな特徴を構成するものである。四十年以上もの長い間、ハイデッガーがものを言えれば必ずといっていいほど、つねにヘルダーリンが彼の念頭にあつたのである。……これは『存在と時間』以来の彼の根本思想にかかわっている——というよりも、むしろ、彼の根本思想そのものなのである。

では、この並々ならぬヘルダーリンへの傾倒の、つまり「ハイデッガーをしてあのように異常に專一にヘルダーリンへと親炙せしめ傾倒せしめた」その「第一次的、根本的な理由」は何か。——一言で言えば、「ヘルダーリンに「在る」という思想

があったからである、……「住む」はハイデッガーの根本思想である。これはまた同時に、著者のハイデッガー解釈全体をカバーする根本的観点でもある。それ故ケール以後を解釈する『第二部「住居説」』の論述は、まずヘルダーリン傾倒の綿密な考証から始まっている。——ハイデッガーが最も愛好し、引用するヘルダーリンの一詩句「人間はこの地上で詩人的に住む」には、「詩人の詩人」というモチーフと「住む」というモチーフとが結びついて出ている。「詩人の詩人」は、詩の本来的なるもの、使命、本質を詩作する。では『その使命、本来的なるもの、本質はどこにあるのか?——それは「住む」にある!とヘルダーリンが詩作していると、ハイデッガーは思惟するのである。……そして、デンケンの使命、本来、本質もまた同じなのである!』そして、このモチーフがもう一つの「根源に近く住むものは、その処を去りたい」というヘルダーリンの句と相まって、やがて一九四七年に、「存在のためにその現成の場処を言う存在のトポロギー」(Aus der Erfahrung des Dankens, S. 23; Neske, Pullingen 1965)として定着した、というのが著者における後期ハイデッガー解釈の大筋である。

「言う」ということ、つまり言葉に関しても、徹頭徹尾トポロギー的に思惟している、と著者は見る。『住む』とは具体的にはどうすることなのか?——それはデンカーとデヒターとが「言う」こと、なのである!……「言葉」は「住む」のいわば具体相である。『ハイデッガーの「言葉論」は住居説に本

質的に属している。そのことを「言葉は存在の家である」という彼の有名な句が端的に示している。」

しかし「言う」こと、場処を言う、ことのその究極は、場処が言う、煎じつめれば「言葉が語る」という「性起」、に帰着するであろう。

#### 4 性起——

この「性起」ということがハイデッガーの長い思惟の道の最終行程のように思われる。」

「性起」についてはハイデッガー自身微妙なニュアンスの違いをこめながら多くの処で語り、著者もまた多側面からこれに光をあてているが、当面、今までの文脈に沿って著者独自の解釈を採りあげればこうである。——他の多くの解釈者は「性起」に言及する際に、それが一体誰に起こることなのかに関してはそれほど強く限定していない。限定したにしても批判的に、例えばヴェルナー・マルクスが『最終的には「ハイデッガー自身が存在に關してなした経験」のせい、に」しているように、『いわば困惑のすえの投げやりとして扱うのが大勢である。これに対して著者はきっぱりと言い切る。『性起』とはもっぱらデンカーとデヒターとにかかわる出来事であり、さらにしほっていうならば、「性起」とはヘルダーリンというデヒターと同じように、ハイデッガーというデンカーに何ごとが起こっているかを語るものなのである!』と。更に著者は、歴史という具体的次元に向い、やや大胆に次のように展開する。

『「性起」は言葉の問題と本質的につながっている。』「性起」



とは、より具体的、歴史的にいえば、ディヒターが「聖なるものを命名」し、デンカーが「存在を言う」ようなことになることである。しかるに、ディヒターとデンカーとが『存在に応じ』答へ、存在のためにその現成の場処を言う、ことによつて『歴史が生起する』、という形で、『ケール以後……』「歴史」の問題は「言う」「または」「言葉」の問題と不可分に密着しているのだとすれば、次のように結論してもさしつかえないであろう。「性起」とは、デンカーとディヒターとが思惟し詩作することにおいて、ヨ、ロ、ッ、パ、の歴史が決定された、ということをおうとするものである。「性起」ということでハイデッガーが言いたいのは、具体的には、このことである」と。

究極的には、「最も遠く離れた山と山との上に、近く住み」  
 「詩人的にこの地上に住んでいる」デンカーとディヒターとは、「性起の内に住んで居る」(Identität und Differenz, S. 26; Neske, Pullingen 1957)。「とすれば、住居説」場を言う場処を言うとは、性起を言うことではなければならない。ところが『性起を言う』、ということとは、じつは性起が言う……、場処を言う、とは、場処が言う、ことなのである。……煎じつめれば、「性起」とは「言葉が語る」ということである。……「言葉が語る」というこの「性起」「の内に住む」ことからすべてが始まる。著者は、こうして、『場処が言う』こととして「場処を言う」ことにもつぱら「集中」して「行く老ハイデッガーの『たゆまぬ労苦のひとつの道』の最終地点を指摘す

ることでもつて本書を閉じている。

#### 四

「後書き」には、この書物は、『ハイデッガーの思惟』をやつとその大筋においてたどりえたにすぎない。まだまだ細かな、あるいは特殊な問題がたくさん残っている、とある。今、残っている『細かな、あるいは特殊な問題』を、私自身の関心から著者の解釈に向う方向で、幾分批判的に詮索すれば、次のような論点が数えられるだろう。

「時間と存在」において、フォアハンデンゼインの出自をトランスツェンデンタルに洗い直し基礎づけることが予定されていた——これが著者の見解だが、実はそれ以上に、本来的時間性を地平にしてのそういう存在理解が、つまり存在Ⅱフォアハンデンゼインというのは違った新しい存在概念が、目論まられていたのではないだろうか。——

またこうしたトランスツェンデンタルな試みの挫折に関して、著者はその理由を、「決定的な」「根本の問い」、即ち「なぜ一体、存在者があるのか、そしてむしろ無があるのでないのか？」という問いに彼が『ぶつかってしまったからだ』と理解しているが、これはハイデッガーの思惟の道に即し、しかも著者のトポロギー的観点からすれば、たしかに、根源の『場処』への極めてポジティブな理由、いわば表の面ではあろう。しかし、何故フォアハンデンゼインの基礎づけ、「時間的解釈」に彼があれほどまでに『はなはだ難渋』したのかというネガティ

ヴな理由には表だつて言及されていない。それはしかし、『存在と時間』において堅持されようとした、あくまでも現象を離れず現象に即していこうとする現象学的な態度に対して、現存在の時間性からする存在のテンポラールな規定という超越論的な概念構コンストラクツツ成ツクが、およそ適わしからざるものとして暴露されてきたからではないだろうか。換言すれば、従来の形而上学の、ないしは近代の、その超克を、超越論的主体性というこれまた極めて近代主義的なやり方に基づいて遂行しよう、という企図が自家撞着をふくんだものとして見えてきたからではないだろうか。こうした理由の検討は、当然、ハイデッガーが『存在と時間』でとつていた解釈学的現象学の立場の問題や、その後の現象学的方法の変貌の問題に接続するであろう、またハイデッガーが哲学史解釈へ深入りしていく動機の説明にもつながるであろう。

また著者の力点の入れ方であるが、ヘルダーリンに対し多くのスペースをさいているのに比べ、ニーチェへの言及があまりにも少ない。ヘルダーリンへの圧倒的傾倒を言うのなら、形而上学克服、存在歴史的思索へのネガティブではあるが最大のスプリングボードともなったニーチェからの背反も同様に重く扱うべきではなかったか。一対となったヘルダーリンとニーチェは、ハイデッガーにとつて車の両輪である。もしここで解釈に均衡を失するならば、ハイデッガーの思惟の道においてニーチェとの熾烈な対決が、いかに、そのヘルダーリン傾倒とも釣り合うほどに鮮明な足跡を刻みこんでいるか、の認識を背景に退

かせることになる、従つてまた、『ハイデッガーの問うことの道に愚直に同行』していこうとする著者の基本的態度に対して、尚不徹底という感想がひきおこされてこよう。是非とも「ニーチェ」の一章が欲しかった。

もつとも、以上私が敢えて挙げた諸問題は、著者の言う『大筋』に比べれば文字通り『細か』で『特殊』な問題であり、事実、トポロギーという観点から「ハイデッガーの思惟」の道を辿つていく『大筋』は、本書において、完全な形で明らかにされていると言つてよい。ところが、これに比べ、『大筋』そのものに対する全体的な批判的検討と、この『大筋』につきまとう困難な問題との方は、実は著者自身によつては表明的に提出されないまま、著者に今後期待される課題として、なお残されているのである。後者に限つて言えば、その一つとして、ハイデッガーの思索に『存在と時間』以来絶えずつきまどつていた言語表現の問題を挙げることができよう。これを私なりに考えてみたい。

ハイデッガーの最終的到達点たる講演『時間と存在』の末尾では、「性起について (von) 言う」場合、「陳述命題 (Aussagesätze)」に於て「語ることは一の障害である」と言明されてゐる (Zur Sache des Denkens, S. 25; Max Niemeyer, Tübingen 1969)。「トポス」とか「性起」は陳述命題<sup>1</sup>すなわち主語―述語関係の構造の内では適切に語ることができない。これはむしろそこで思索の言葉が途絶する事態であり、『存在と時間』以来絶えずハイデッガーの思索を難渋させてき

た事態である。敢えて率直に表現すれば「性起は性起する」というタウトロギーに帰着するであらう。通常の哲学的科学的な観点からすれば、これは笑うべき無意味さの最終的な証明以外の何ものでもなからうが、この事態に堪え通し、考え抜くところに彼の思索の本領、いわばエートスがあるのであって、彼の文体の故意の特異性、例えば『存在と時間』における独特で生硬な散文スタイルとか、後期のむしろ詩作<sup>ポエジー</sup>とも言いうべき言い方とか、息づまるほど難解なエティモロギーとかはその起源をおそらくここにもつのであらう。ハイデッガーにおいては、言葉は真にプリミティヴな経験の次元にまで関与しているものとして見られているため、事態が錯綜するのである。しかし、だからと言って、ハイデッガー的に定式化された思索スタイルをそのまま踏襲して、思索の可能性を、ひいては「哲学の終末 Ende der Philosophie」に際する思索の可能性を、ハイデッガー的な方向にのみ限定する理由は必ずしもないであろう。むしろ「哲学の終末」という言葉は、ハイデッガーの思索が、徹底した自己反省の究極を示そうとして行きついたところから出てきているのであって、哲学という根本的に「問う」立場に立脚する思索的営為の可能性は、ハイデッガー的な行き方とはまた別のところでも開けるのではなからうか。例えば、その可能性の一つとして西田哲学における「場所的論理」の構築の努力を見ることが出来る。

情的に表現すれば、西田の歌、「わが心深き底あり喜も憂の波もとどかじと思ふ」(大正十二年)にある、内とも外とも限定

されない「深き底」、論理的に表現すれば「絶対無の場所」、実在のこうした根底は「知識以上の或物」(西田幾多郎全集「第二巻、二七八頁、岩波書店、昭和四十年版」として、「もはや論議の立場ではない」(第五巻、四四二頁)次元に位置する。

ところが、「論理と云ふものは、実在の自己表現の形式と考へる」(第十一巻、六〇頁)、即ち、実在はその自己表現において或る一定の論理的パターンを有する、という直截な確信が、「哲学は何処までも論理的立場の上に立たねばならない」(第五巻、一三九頁)という要請と結びついて、「場所」の論文以後特に強く見られるような、論理形成のためのヘラクレスの努力に西田を駆り立てたのである。勝義に直観的直証的な実在の根底は、その直観的直証性の故に論理化を拒絶されるべき筋合のものではない、それは、「生と実在とに一つである」(第十四巻、三四三頁)新たな論理観を含む哲学の内での、その自己表現において、直観性直証性を失うことなく、当然みずからの論理的形式を要求し得るし、またそれに応答すべき説明の論理的方式が見出されなければならぬ——そう西田は考えたのである。その一つの論理的試案が「場所的論理」である。そしてその最後の立場の自己表現たる絶対無の自己限定(論理)を究明することが、絶筆『私の論理に就いて』に至るまで、西田の最大の課題となったのである。

ところで、西田の文脈の中での「実在の自己表現」という事態は、ハイデッガーの文脈での勝義の「現象 *Phanomen*, das sich-an-ihm selbst-zeigen」として受け取ることが可能であ

り、「絶対無の場所」の経験が内に孕む直観的直証性をも論理的形式の中に掬い上げようとする努力は、文字通り現象学の可能性を徹底して追究する姿勢に相当するものであって、決して過少評価できない。

さて、どこまでもこの自覚に徹しようとする不退転の姿勢においてハイデッガーと親近なところがありながら、「哲学」の可能性に対して異なる見方を持つ西田の場合を、今、とりあげてみたのだが、そもそもハイデッガーの努力も「語られぬままに留らざるを得ぬかのもの (Jenes)」（*Aus der Erfahrung des Denkens*, S. 21; Neske, Pfullingen 1965.）を思索の言葉にまたらそうとする「言葉への途中 (Unterwegs zur Sprache)」であったわけであるし、また著者の『ハイデッガーの思惟』におけるトポロギー説明も、このハイデッガーの「たゆまぬ労苦のひとすじの道」を一緒に歩むことにおいて、思索の言葉と経験の真にブリミティヴな可能性の領域を自ら試掘したものである。実際、著者は「後書き」の末尾にこう述懐している。

しかし、それにしても、ハイデッガーの思惟は、けつっきょく、語のきわめて複雑な意味において一個のアウトピオグラフィナーなのだろうか？そして、私のこの本も？と。

(J)

（筆者 たけうち・とおる 高野山大学文学部〔倫理学〕・

竜谷大学経済学部〔倫理学〕非常勤講師）

### 前 号 目 次

睡眠と帰属の理論（承前）……………	山内得立
デカルトの自由意志論……………	西村嘉彦
相互作用論から見たキャリア分析……………	宝月 誠
——『ジャック・ローラー』の解釈 の試み——	
ヘーゲルの啓示宗教論……………	氷見 潔
——『精神現象学』における——	
書評 浜田義文『カント倫理学の成立——イギリス 道徳哲学及びルソー思想との関係』……………	小熊勢記